

〈修士論文要旨〉

MSSM（交互ぐるぐる描き物語統合法）における 誘発線の機能についての臨床心理学的研究

—— 青年期後期を対象とした実証的および事例的検討 ——

藤 内 三 加*

本研究の目的は、MSSM（Mutual Scribble Story Making：交互ぐるぐる描き物語統合法）の臨床的治療効果の指標をつくるための基礎的研究である。まずは、①スクリブルからMSSMまでの描画法の変遷を記述し、②セラピストが描く誘発線とクライアントが投影するモチーフとの関連性、特にセラピストが「尖った描線」を描き、クライアントが描線にモチーフを投影するまでの時間の間、どのようなことを感じているかを検討することである。

21歳から29歳の青年期後期にあたる大学生と大学院生22名（男性11名、女性11名）を対象に、MSSMを半構造化面接法で実施した。得られた資料を基に、「尖った描線」に絵を投影した反応時間の平均値と「ぐるぐるした描線」に絵を投影した反応時間の平均値をt検定を用いて比較した。結果は、「尖った描線」に絵を投影した反応時間の方が有意に長かった。また、MSSM実施後のインタビューより、「尖った描線」から「窮屈さ」や「緊張感」などの主観的な情緒を記述した調査対象者の割合は66.7%と比較的高かった。また、「尖った描線」をみた時の調査対象者の感想は、「被害感」「罪悪感」「競走心」を感じた者が90.8%と高かった。さらに、「尖った描線」に描いたモチーフでよくみられたものは、「砂時計」「罫」「ヨット」「キツネ」であった。これらのモチーフの象徴で共通にみられたものは、「死と再生」「豊饒」「両性具有」であった。青年期後期の青年に対して、MSSMを心理カウンセリングで用いる場合、クライアントに、尖った描線から投影されたモチーフを物語で主体的に織り込んでもらい、自己にある死生観やアニマとアニムスを物語の中で語ってもらい、それをセラピストと一緒に、しっかりとフィードバックする必要がある（クライアントの内なる“ヘルメスの容器”をつくる作業の必要性）と示唆した。

今後の研究課題は、以下の3つである。

- ① 調査対象者を増やし、「尖った描線」への反応時間が長くなった原因を細かく見ていくこと。
- ② 心理カウンセリングにMSSMを導入する際に、「尖った描線」をどの時点（何往復目）で導入すると治療効果があるか。
- ③ 描線の形からどのようなモチーフが投影されやすいか、物語の作りやすいモチーフはどれかなど細かくみていくことである。